

クリスマスを迎える喜び

皆さんはクリスマスをどのように迎えますか？
初等部・中等部・高等部の在校生と先生方に、クリスマスを迎える
いまの想いやクリスマスの思い出を綴っていただきました。

高等部教諭 樋口 玲子

高等部
Senior High School

今度はわたしたちが

子どもの頃、“クリスマス”が近づくと、サンタさんのプレゼントが楽しみでした。でももっと興味があったのは、サンタさんに会えるか？ ということです。イヴの夜、眠い目をこすって一生懸命起きていようと頑張るのですが、どうしてもどこかで眠ってしまい、「あ～、今年も会えなかった……」ということは何年か繰り返しました。そしてある年、イヴの夜にサンタさんがおもちゃを買って帰ってくるところを目撃してしまいました。そのコソコソとした後ろ姿に心がとても温かくなったのを覚えています。

大人になって、今度は息子のほしい物をサンタさんをお願いするようになると、それがもっと幸せな気持ちへと変わりました。大好きな人のためにプレゼントを用意することほど、幸せなことはありません。

“クリスマス”は、大好きな私たちのために、神様がイエス様を送ってくださった日です。それには大きな痛みが伴いました。その愛と痛みをしっかりと受け止めて、私たちもまた誰かのために何かをささげることができたら……と思います。



高等部クリスマス礼拝

3年 櫻井 奏楽

なんか日曜サンタさんも

来るっぽいけどどうする？ やめとく？

最近は段々と肌寒くなってきて、クリスマスが近づいてくるのを実感させられます。しかし、あのサンタさんとて、あまねく全ての人に歓迎されるわけではありません。世の中にはクリスマスに拒否感を持っている人々が一定数存在していて、時にサンタさんはワインやクッキーどころか、罵声を浴びせられて追い返されてしまいます。それなのに、彼は毎年毎年やってきて、良い子の枕元にプレゼントを置いていってくれるのです。必要とされていないのにやってくる、というのにはなかなか強い精神が必要だろうと思います。

今でこそキリスト教は世界に浸透していますが、初めのうちは迫害を受け、石を投げられていました。きっとキリスト教にルーツを持つサンタさんにとっては、この程度の小石はいちいち腹を立てるほどのものでもないのでしょう。

僕はオルガン部の活動として、自ら楽曲を制作し、演奏をすることがあります。これも誰かに頼まれてやっているわけではなく、自主的に行っていることです。他人から求められなくても、自分がすべきことを探して実行する行動力こそが、周りの人々、そして自分自身にとって大切なことなのだと思います。



高等部PS講堂オルガン

3年 福岡 奈那香

助ける勇氣

私は中等部に入学するまで「クリスマス」に対して特別な思いはありませんでした。クリスマスには欲しい物が貰える、まるで自分の誕生日のような楽しい行事と捉えていました。しかし中等部でクリスマス礼拝を経験し、聖歌隊としてご奉仕したことで今までのクリスマスへのイメージが変わりました。

また、クリスマスはイエス・キリストに関係があることは知っていましたが、実際にイエスが何をしたのかは全く分かっていませんでした。しかし、聖書の授業や日々の礼拝を通してイエスがいかに弟子たちに信頼される偉大な方かを知ることができました。特に「善いサマリア人のたとえ」(ルカによる福音書 10:25-37)のように、困っている人がいれば誰にでも手を差し伸べることが大事だという教えに感銘を受けました。

コロナへの不安がなくなる今この世の中で本来のクリスマス礼拝を経験することは難しいと思いますが、これからの未来に経験できる機会を楽しみにし、また日々の生活の中で困っている人を見掛けたら勇氣を持って声を掛け、助けになれるよう行動できる人になりたいと思います。



中等部礼拝堂にて

3年 日野 翔太

アドベントクランツ

アドベントクランツに火が灯るとクリスマスの準備が始まります。アドベントクランツとは四本のろうそくから成っており、一つ一つのろうそくに意味があります。

一本目は「希望」、二本目は「平和」、三本目は「喜び」、四本目は「愛」となっています。一本目と二本目の意味をこの中等部に入ってからより深く考えるようになりました。

僕達はコロナの影響で入学式が六月に遅れ、友達と会えず、家で一人で課題を進めていました。マスクは当たり前となり、不要不急の外出を避けるという状況で世の中の人すべてが「希望」を見つけられずにいたと思います。

二本目の「平和」で思い出すことは「クリスマス休戦」という実話です。第一次世界大戦の中、イギリス・フランス・ドイツがクリスマスの日に一時的に停戦をしました。この話を聞き、クリスマスには平和をもたらす力があるのだと分かりました。

今なお世界で続いている争いが一刻も早く終わり、クリスマスのろうそくにもある通り希望を捨てず、世界中に平和が訪れることを祈りながら今年のクリスマスを待ちたいと思います。



中等部礼拝堂にて



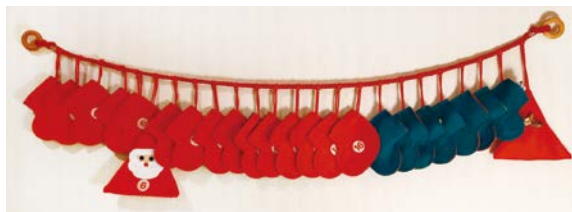
6年 池上 奏

わたしのクリスマス

わたしのクリスマスは、靴下のアドベントカレンダーから始まります。このアドベントカレンダーは、私の祖父がウィーンの音楽家の友人からいただいたもので、母が子どもの頃から飾っている大切なものです。毎朝、起きてすぐにアドベントカレンダーを一枚めくると、緑色の靴下が赤色に変わり一日ずつクリスマスに近づいていくようでとってもわくわくします。

クリスマスの週の日曜日には、教会でページェントを行います。幼稚園生から高校生までが一つになって演じます。

そして私がいちばん好きな12月24日のクリスマスイブ。夕方に教会に集まると、会堂の電気を消し、一人一人がろうそくを持って聖書の御言葉を聞き、讃美歌を賛美します。コロナ禍になる前には、礼拝後にキャロリングに出かけていました。ろうそくをもって近くに住んでいる教会員の方々のおうちを回り、讃美歌を歌うのです。そして、クリスマスの訪れを伝えるのです。日本には、クリスマスの本当の意味を知らない人がたくさんいます。そんな中で、私は本当の意味を知り、イエス様の誕生を心からお祝いできることに感謝したいです。





初等部教諭 柚村 満

クリスマスの思い出

私は、アメリカ合衆国ミシガン州アナーバーにある美しい雪景色が見える家で家族とクリスマスを迎えることが多かったです。リビングには暖かい薪が燃える暖炉があり、大きなクリスマスツリーの周りには親戚、友人から届いたクリスマスカードと贈り物が置かれていました。家の中では、アメリカの家族がピアノやバイオリンでクリスマスの演奏をしてくれ、イエス様の誕生を嬉しく思い、心に平安が溢れました。イブの日は、夕食を済ませて、教会でクリスマスイブの礼拝を守り、聖書の御言葉とクリスマスのメッセージを聴いて、心に大きな喜びを持って家路につきました。クリスマスの朝は、アメリカの家族が毎年 Eggs Benedict という料理を作ってくれました。

私の家族もアメリカの家族もクリスチャンファミリーで、クリスマスの日も家族8人で輪になり手をつないで、一人一人が神への感謝と願いを祈りました。アメリカでのクリスマスの思い出は家族の生涯の宝となり、神様に感謝でいっぱいです。



2003年ミシガン州アナーバーにあるバード家の庭で